NPO活動におけるボランティアの学びと成長

―― 高校生の進路選択支援活動に携わる学生を事例に ――

広崎純子[1]　酒井　朗[2]　千葉勝吾[3]　風間愛理[4]

本研究は、高校生の進路選択支援を目的に設立されたあるNPO法人が、支援にあたるボランティアにとって、どのような学びと成長の機会となり得ているのかをメンバーへのインタビュー調査に基づき解明したものである。分析では、支援する側とされる側の関係性に注目し、ボランティアが生徒とどのような関係を築き、また活動を継続いていく過程で変化していったのかを記述するとともに、そこで彼らが何を学び、成長していったのかを解明した。ボランティアたちは生徒との間で悩み葛藤する中で、それまで抱いてきた自己の価値観を振り返りながら、自分の関わり方を理解するようになる。さらに活動を継続させる中でその関わり方に変化が生じると、それを通じてボランティアはさらに自己の役割や立場を見直していくのである。

1．はじめに

本稿は、高校生の進路選択に対して支援活動を展開しているNPO法人「TEAM」のプロジェクトが、支援にあたるメンバーにとってどのような学びと成長の機会となりえているのかを解明するものである。我々はこのNPOの前身であるボランティア活動に発足時から継続的に関わっており、現在もなお20名近い大学生、大学院生とともに活動を運営している。

NPOの教育力については、全国のNPOを対象とした実態調査やリーダーへの意識調査に基づいた佐藤（2004）の研究がある。そこにも指摘されているように、NPOに関して教育学的視点から、その教育力を分析したものはこれまでは少なかった。だが、この佐藤の研究を初めとして、近年次第に関心を集めつつある。

本稿はこうした流れを受けているものの、NPOに実際に当事者として継続的に関わる中で見えてきた「学びと成長の契機」を個々のボランティアの事例に則して具体的に解明しようとする点に特徴がある。なお、ここで取り上げるプロジェクトに関しては、支援をうける側の高校生の進路意識のあり様と、支援を通じての彼らの変化を、酒井ほか（2004、2005）で報告している。本稿はこれに続き、支援をする側の意識と変容について検討するものである。

2．ボランティアやNPOを巡る議論の構図

本稿を通じて批判したいのは、社会構築主義的な観点からみた場合に、従来のボランティア論・NPO論にはある特有の議論の構図があり、しかもそのことが学びや成長という問題の論じられ方に対してある種のバイアスをかけていることである。

橋本・石井（2004）は、過去から1990年代にかけてのボランティア論の構図を相対化する作業を試みている。それによれば、ボランティアは従来は「奉仕や献身」として語られてきたものが、90年代以降はボランティア個人の生き甲斐や楽しみ、自己実現の観点から論じられるようになったと言う。橋本らは、新聞紙上におけるボランティア言説の変容に関する分析を行い、90年ごろを境にして、それまでの「自発性・無償性」を強調する議論から、「自己実現」としてのボランティア論に変化していく様を描きだした。

だが、これらの論じ方には、90年以前にもそれ以降の議論にも共通している特徴がある。それは、これまでの議論には一貫して、ボランティアを「する側」と「される側」の関係性から論じる視点が欠落していることである。原田（2000）はこの点を鋭く批判し、ボランティアの意味を両者の関係性の中で読み解いていく必要性を指摘した。ボランティアとは、「出会ったこともない人と新しい関係をはじめるという意味では、緊張と勇気を伴う行動であ（105頁）」り、氏は「組織的な支援によって個別の関係を支え、継続させる」ことの重要性を指摘した。

翻って佐藤（2004）におけるNPOの論じられ方を見

1 早稲田大学　2 お茶の水女子大学　3 東京都立田園調布高校　4 お茶の水女子大学大学院

ると、そこでも同様にNPOにおける市民の自主性、自発性が強調され、「する側」だけに光が当てられる傾向が強い。たとえば高橋（2004）はNPOを学びの共同体とし、そこでは人々が同等の権利を持ち行動し、批判的に考え、決定に参加することを不可欠の要件とし、他のメンバーとの社会的な共同行為を通して具体的な状況に即した社会理解を進めていくと論じている。

しかし同書で指摘されているように、実際のNPOの多くは学習支援の活動であり、そこには当然ながら「される側」が存在している。我々が本報告で指摘したいのは、この「される側」との関係性の中でのボランティアの学びと成長である。

3．プロジェクトの概要

(1)経緯

本プロジェクトは2000年9月に、A商業高校（以下A商）から大学進学を考えながらも諸事情から学校の進路指導に乗れない生徒に対して、進路選択支援をおこなう大学生ボランティアを派遣してほしいという要請を受けて開始された。A商は首都圏都市部にある全日制公立高校である。2000年3月の卒業生は79名で、卒業までの3年間で81名が中途退学するという状況であり、「大学進学なんて無理」という認識が生徒と教師の双方に共有されていた。本プロジェクトは、AO入試や自己推薦入試に生徒をチャレンジさせ合格実績をあげることによりこの状況を変えようという、3年を担任していたある教師の発想から開始された。

当初は大学教員の酒井がゼミなどで声をかけ学生を募り、活動内容も高校側と酒井の設定したものであったが、年毎に大学生の主体的な活動へとシフトし、2002年には学内でサークル化され学生主体の活動へと移行した。さらにより充実した効果的な活動を展開するために、2004年にはNPO法人格を取得し、NPO法人「TEAM」として設立された。

(2)組織

NPO法人「TEAM」は青少年の進路選択支援をおこなうことを目的に設立され、役員は2000年の活動開始時から関わっている大学教員、高校教員、専門職、大学院生などが主体であるが、法人設立時には活動に直接関与していなかった研究者・教員にも役員就任を依頼した。

日常的な活動をおこなう会員は、現在、約20名である。会員の多くは教育系、社会科学系の大学生・大学院生で、所属大学はお茶の水、早稲田、上智などである。参加したきっかけは、サークルの新入生勧誘ビラや授業で配られたチラシを見て連絡してきて参加する場合と、この活動に既に参加しているメンバーに勧誘されて参加するという2つのパターンがある。このほかにも、TEAMの活動を新聞などのマスコミで知って参加したいと連絡してきた社会人のメンバーもいる。

(3)対象

「TEAM」は、定款上は広く青少年を支援の対象としているが、現在は首都圏にある公立高校2校、私立高校1校の計3校で定期的に活動している。支援の対象としている生徒の数は、3校合計で20数名である。なお、公立高校のうち一校がA商であり、もう一校は普通科の進学校（B校）である。また、私立高校（C校）はコース制の普通科女子高校である。

2004年の法人設立までの支援対象はほとんどA商の生徒で、何らかの支援をおこなった生徒は約50名に達する。対象とする生徒は、主として3年生であったが、最近では早期から進路意識を喚起することをねらいとして2年生の希望者も対象としている。

参加する生徒は、学校側が募集もしくは生徒に声かけして集めているが、中には生徒同士で誘いあって参加するケースもみられる。

(4)活動方針と内容の変化

2000年は、2学期後半に10回、予め決められたテーマで小論文指導を行うという、期間と回数、内容が限定された活動で、参加した生徒も5名のみであった。2001年には、前期は生徒会のアドバイザーとして生徒会の会議や合宿に参加して助言をし、生徒との信頼関係を築き、後期に入ってから個別に進路について相談に乗ったり、小論文の指導（15回）をしたりするようになり、活動形態に若干の変化があった。2002年以降は、1学期後半から、週1～2回以上大学生がA商に通うようになり、雑談から始め、徐々に進路相談や小論文指導を行うというスタイルになった。生徒の参加回数には個人差があるが、毎年10名前後が活動に参加している。

また、2002年以降は、大学生・大学院生に進路について相談できることは、授業やプリント、掲示等を通して生徒に広くアナウンスされた。だが、実際に参加した生徒たちは、教員に個別に相談したところ大学進学を勧められたか、教員から大学進学を進路先として提示された生徒である。活動の場では、大学生・大学院生と接し大学生の実態を肌身で感じさせるととも

に、大学進学に向けての時間を共有し実現に向けて努力するという価値をボランティア側から生徒に対して明確に提示し、なかなか取り組めないでいる生徒を進路決定に向けて頑張らせる支援活動を行ってきた。

⑸支援の枠組み

支援対象の生徒本人とともに、進路選択について考えていく個別的な支援（パーソナルサポート）を基本とする。具体的には、進路選択の相談や学校が提示する進路先などについての検討などをおこなうとともに、小論文・面接、基礎的な学習などの支援も実施している。

活動パターンは学校ごとに異なるが、週１、２回、１回２～３時間、校内の学校側が用意した教室でおこなうのが通例で、毎年、AO･推薦入試がスタートする秋から12月頃までが活発になる。

高校生を対象に個別的なサポートをおこなうのがTEAMの活動内容で、支援の枠組みはA商の場合、以下のようになる。

実際の活動では、１つのパーソナルサポートが実施されることもあれば、３つのパーソナルサポートが混合されて実施されることもある。また、サポートの内容が段階的に変化していくこともある（表１）。

その具体的な内容は下記の通りである。

① パートナーサポート

学習に対して努力しない生徒はもちろんのこと、努力してもなかなか成果が上がってこない生徒の悩みや、進路自体どのようして選択して行けばよいのかわからないといった生徒に対する支援を想定している。これは、本来、保護者が援助する領域であるが、家庭環境が複雑であったり、進路先である学校や企業が複雑となったりしていて、いったいどうアドバイスしてよいのかわからないということを問題として捉えている。

パートナーサポートは、そのような生徒に指示するのではなく、わからないもの同士で納得できるまでともに話し合いながら、調べたり考えたりしていく場を提供する。したがって、サポートの形態は個別的なかたちが多いが、場合によっては友達どうしや同様な悩みを抱えるもの同士のグループに対するサポートもおこなわれる。

② コーチングサポート

この形態の個別的な指導は、基本的には学校現場で通常に個別指導としておこなわれているものと同一である。そのためにこのようなサポートの必要性が疑問視されることもあるが、実態としては生徒の中には先生じゃいやだけど、大学生なら教わりたいということもあるので有効に機能する。

また、個別指導を熱心におこなっている教師のTA（ティーチングアシスタント）として参加すれば、より多くの生徒に対するサポートが可能となる。

このサポートは個別でも、同じ課題をもった小グループを対象としたサポートでも可能であるが、内容・教材について学校と打ち合わせが必要になる場合が考えられる。

③ コンペティションサポート

AO入試や自己推薦入試では、学力達成以外の能力を重視した入試がおこなわれている。その際に学力以外のメリトクラティックな内容をどのようにアピールできるかが合否の重要な要素になっている。

その方法は多様だが、例えば各種のコンペやコンクールに応募して実績を評価してもらったり、活動の記録をプレゼン資料にまとめたりするといったことが

表１　高校生の進路選択に対するサポートの概要

支援形態		支援対象	支援内容	支援者	
サポート	パーソナル	パートナーサポート	思い迷い悩んでいる・わからない	ピア･カウンセリング的､おしゃべりしながらともに考える	家族	TEAM
		コーチングサポート	方法・手段がわからない	小論文・面接対策・基礎学習・勉強のしかたなどの具体的な個別サポート		
		コンペティションサポート	きちんと評価されたい	外部評価を得るための各種コンペなどへの応募サポート、プレゼン・面接対策		
グループ			目的意識・進路目標がある	習熟度・進度別の講義や演習	学校	予備校

考えられる。

このような作業は、生徒が積み上げてきた活動以上に重要なこととなるのだが、多くの学校では本人任せになっているので、その部分をサポートする意味は大きいと考えられる。実際に、AO入試や自己推薦入試で多くの実績を上げているのもこのサポートによるものが多い。

⑹活動成果

A商業高校では1999年までは大学進学を目指す生徒はほとんど見られず、学校側もあきらめていたが、本活動により大学進学者が毎年出るようになった。過去4年間にA商で大学進学を果たした生徒の8割は、なんらかのかたちで本活動の支援を受けている。なかでも自己推薦入試・AO入試などで、早稲田、中央、首都大学東京などの難関大学にも、同レベルの高校では例のない合格実績をあげた（表2）。

⑺標準的な活動パターン

現在の活動は、決められた曜日の放課後に1～3名の大学生がA商を訪問するという形でおこなわれている。高校に着くと決められた教室に行くが、予定の時間になっても生徒がなかなか来ない時があるなど、生徒のペースでスタートする。小論文の練習、漢字の勉強といったおおまかな予定はあるものの、試験や願書の締め切りが近いといった場合を除けば、おしゃべりが活動時間の半分以上を占めることもみられる。

生徒机で向かい合いながらマンツーマンで活動をおこなうこともあるが、学生ひとりが2、3人の生徒を指導することもあり、参加する生徒と学生の人数は事前にある程度は調整するものの流動的である。

また、その日の活動は、参加した学生からメーリングリストに流され、それが引き継ぎとなっており、参加する学生は事前に目を通しておくようになっている。さらに月1回程度、活動に参加している学生と大学教員、高校教員が集まり支援の中身を具体的に検討するカンファレンスをおこなっている。

4．リサーチクエスチョン

以下では、本プロジェクトの発足時から現在までのいずれかの時点で、活動に関わった学生、大学院生に対する半構造化インタビュー調査の結果を報告する。

そのために、まずNPOなりボランティア活動における、「する側」と「される側」の関係性を原理的にどう捉えるのかを考えておきたい。原田（2000）が指摘するように、ボランティアとは、何らかの具体的な行動を通して、人と人が結びつくことを特徴とする。氏の整理を援用すれば、そこでは、⑴普通なら関係をもつことのない「知らない人」同士の出会い、⑵「違い」を根拠として部分的に関係を結ぶ、⑶継続的な具体的行動、⑷日常的な関係の中に入りこむ新しい関係の形成、などの要素が原理的に含まれている。

TEAMの活動においても、まさにこうしたボランティア活動の要素を色濃く有している。その活動を通じてボランティアの学生たちは、普通なら出会うことのない「高校生」に出会う。とりわけ、当初我々が活動をしていたのは、A商業高校という専門学科の高校生であり、学生たちとは通っている高校のタイプが異なっていた。

活動において、彼らは相互の違いを意識しながら部分的に関係を結んでいく。ただし、それは継続的に遂行されるものであるため、関係に変化が生じたり、関係の受け止め方も変わってくる。さらに、学生たちは学校では教師でもなく、また生徒でもない、第三者である。こうした異分子として入り込むことで、ボランティアによっては己の立場に戸惑ったりもする。こうした原理的な要素を含みこんだ関係を通じて、ボランティアが何を学び、成長を遂げるのかが、本報告の基本的な問題関心である。より具体的には、我々は下記の諸点をリサーチクエスチョンとして立てた。

表2　A商での実績（過去5年間）：目標として検討した大学と成果（一部）　○合格、△1次合格、×不合格

首都大学	各学部	未来塾、ゼミナール入試	○
埼玉大学	教育	自己推薦	
千葉大学	教育	自己推薦	
一橋大学	商学	自己推薦	
早稲田大	教育、社会科学、法学	自己推薦・AO	○△××××
慶応大学	国際情報	自己推薦	
中央大学	商学部	自己推薦	○
明治大学	各学部	AO	△
法政大学	キャリアデザイン	AO	○

(1)ボランティアたちは、生徒との出会いをどのようなものとして経験し、そこで何を学んだか。

(2)彼らは生徒との違いをどう意識し、そこでどんな関わりを持とうとしたのか。

(3)活動を継続していく上で、関係はどう変化し、そこで彼らは何を考え、また学んだのか。

(4)活動の場である学校内で、彼らはボランティアという立場をどう意識したのか。そして、そこから彼らは何を学んだのか。

5．インタビュー調査の概要

インタビューの対象者は、2000年9月に本活動が始まってから現在までの間に、ボランティアとして関わった（関わっている）大学生・大学院生である。ボランティアは合計で約30名であり、その中で活動に比較的継続的に関わっていた13名を対象として調査した（1名はメールでの回答）。

本活動が始まった当初（2000年）は、5名の大学生ボランティアが決められた日にA商に行き、予め決められたテーマで小論文を書かせるという活動であった。だが、年々活動は拡大して行き、2005年は、4月から週2回定期的に数名の大学生ボランティアがA商に通い、進路相談や出願書類の作成、小論文指導などを行なっている。また、2005年4月からB高、C高でも同様の支援活動が開始され、現在ボランティアとして関わっている大学生・大学院生は、3校合計で約20名である。

インタビューの実施にあたっては、活動に継続して参加したボランティア（各年度2～3名）に連絡をとり依頼した。調査できた13名の対象者がボランティアをしていた時期は少しずつずれており、また活動の内容も年々少しずつ変化している。それぞれが活動に参加した期間と活動内容は、表3のとおりである。なお、右端の欄にある名前はすべて仮名である。

調査時期は2005年6月～8月。調査項目は、活動に参加したきっかけ、初回の感想、活動の具体的内容、印象に残っている生徒や出来事、活動を通じて学んだこと、うれしかったこと、困ったこと等である。インタビューはトランスクリプトに起こした上で、質的調査法に基づいてカテゴリー生成を試みた。そして、それをもとに、彼らの学びと成長の特徴を以下に描きだす。

6．事例の報告

まず、2000年から2003年の間のいずれかの時点で入会し、中心的なメンバーとして活動に参加してきた5名のボランティアの事例について、リサーチクエスチョンで挙げた各項目に関して概要を報告する。彼ら

表3　調査対象者の活動参加状況

	活動期間	活動内容	特徴	支援成果（合格大学）	参加したボランティア
I	2000年9月～2000年12月	10回の小論文講座。後半は志望大学毎に対応。	大学のゼミ（学部生対象）で参加を募り、有志が参加。	拓殖AO 千葉商科AO 東洋学園大	Aさん Bさん 秋田さん（～II）
II	2001年7月～2001年12月	生徒会研修会に参加し支援。9月以降は、15回の小論文講座。	継続して活動する大学生に新人が加わる。	中央自己推薦 千葉商科AO 駒沢、東洋（推）	山村さん（～VI） Cさん（～IV） Dさん（～III）
III	2002年7月～2002年12月（2003年2月）	7月から週1回の活動。夏は中断し、9月から活動再開。	学内サークルとして活動を開始。	東洋二部（推） 千葉商科AO	松川さん（～IV）
IV	2003年6月～2004年2月	進路相談、小論文対策、漢字指導。東京未来塾の支援。	学内サークルとしての性格を強め、合宿・コンパなども実施。	早稲田自己推薦、東京未来塾、千葉商科AO	Eさん 金沢さん（～VI） 水本さん（～VI）
V	2004年5月～2005年3月	進路相談、小論文対策。	インカレサークルとなり、10月にNPO法人化。	首都大 特推 千葉商科AO 東京未来塾	Fさん（～VI） Gさん（～VI） Hさん（～VI）
VI	2005年4月～現在	進路相談、小論文対策、B校では2年生対象の学習支援活動。	B校、C校でも活動を開始。	未定	

はボランティアの成長過程に関する諸特徴を典型的に示しており、ここでの分析において中心的にとりあげることとした。

（ケース１）秋田さん

大学３年の時（2000年）に、ゼミで高校生に対する「大学入試（AO入試）のための小論文対策講座」を行なうので、参加しないかという呼びかけがあり、教員志望だったので、「今の高校生の現状を肌で感じてみたい」「自分の進路を決める上でプラスになることであれば、負荷になるかもしれないけど参加しよう」と、明確な意識を持ち活動に参加した。この活動が始まった最初の年で、秋田さんは全10回のうち、５回参加した。

秋田さんは、この活動に参加する前は、商業高校の生徒に対して「高校時代の生活を楽しんじゃっている」「なんとなく高校生活を送っている」というイメージを持っていた。だが、Ａ商の生徒に出会い、それなりに自分の将来を一生懸命考え、自分の意志をしっかり持って大学進学を目指し、わざわざ放課後にこの活動に参加して来る生徒たちの姿を見て、「人生に投げやりだったりすることがあるわけでもなく、普通の子たちなんだなあ」「しっかりした子もいるんだ」と感じた。また、高校生と大学生という立場の違いから、「いま高校生が興味を持っていることとギャップがあって、共通の話題がないかもしれない」と思っていたが、高校生の方が心を開いて相談を持ちかけてくれたり、質問にも一生懸命に答えてくれたりしたことで、「会ってみればいい高校生じゃん」「へんに身構えなくてよかったんだ」と、高校生に対するイメージが変化した。

活動の内容は、決められたテーマで小論文を書かせ、それを添削するというもので、「小論文のプロではないので、こんなのでいいのかしら？」「どういうふうに指導していけばいいのかしら？」という迷いはあったものの、「自分のできる範囲でやればいい」「ゆるい活動」と捉え、組織というほど組織的ではないが、顔見知りの友だちと一緒にやれるということで、比較的気楽に参加していた。

秋田さんは、自分達のＡ商内部での立場を、「外部の人」と位置付けている。その上で、進学校なら学校内でまかなえる範囲の指導をするにあたり、商業高校という固有の事情、つまり、外部の人を頼まなければ大学入試対策ができない現状から、自分たちが呼ばれることになったことを、「学校ってやっぱり一人の人間が一生懸命になっても、動かすのはなかなか大変かもしれない」と漠然と感じた。教員志望の秋田さんにとって、そういった大変な状況の中で、Ｂ先生と生徒との深いつながりを目の当たりにできたことは、「先生っていいなぁ」と再確認する機会となった。だが一方で、「Ｂ先生が孤軍奮闘して、つてを探してきてやらないといけない」ほど大変なことを自分でやっていく自信がないと、実感させられる契機ともなった。

秋田さんは、自分自身の進路を考える大学３年の時にこのような経験ができたことを、自身の進路を決定する上で有意義だったと受け止め、また、ともすれば就職という進路に水路づけられてしまいがちな商業高校の生徒たちにとっても、大学進学という選択肢が示されることにより将来の可能性が開かれるという意味で、この活動を肯定的に捉えている。

（ケース２）山村さん

大学３年の時（2001年）に、ゼミで活動についての説明があり、「面白そうだな。取り合えず行ってみよう」と思い参加。以来、５年間継続して活動に関わっている。2001年の前期の活動は、生徒会のアドバイザーとして生徒会の会議や合宿に参加して助言をするというもので、後期に入ってからは、個別に進路についての相談に乗ったり小論文の指導を行ったりした。2002年以降は、進路についての相談と小論文指導が中心的な活動になり、大学進学という進路に向けて努力するという価値を前面に押し出した活動が行われるようになった。

山村さんが最初にＡ商の生徒たちと出会ったのは、生徒会活動への支援を通してであり、生徒会役員の生徒たちに対し、「真面目な、活発な人々だな」と感じた。また、生徒会合宿に参加して、生徒達がパネルディスカッションで自分の意見をはっきり伸び伸びと発言しているのを見て、「高校生っぽくない」「わたしの今までに会ったことのない人だな」という印象を受けた。進路についても、山村さんがそれまで持っていた「大学行かない人は、就職するか専門いくか」という典型的な型に捉われていないことを知り、「わたしは何だったんだろう」「（大学進学）は本当に選択肢の一つに過ぎないんだ」と、自分の世界の狭さを実感し、自身の価値観をゆさぶられる思いを感じた。

ただし、勉強の面では、宿題をやってこなかったりやり始めても雑談をしたりすることは珍しくなく、「夜起きて遊んで、朝寝て、昼学校に来る」という生活パターンの生徒もいて、勉強や受験準備の計画通りに進

まないこともしばしばあった。

A商の生徒の中には、大学進学と東京ディズニーランドでのアルバイト（フリーター）とを同等の選択肢と考えるような生徒もいる。このような進路意識を持つ生徒にとっては、「大学進学に向けて努力する」というTEAMの方針に沿った支援は、「余計なお世話」「おせっかい」的な活動と受け取られることもあり、生徒の中には自分なりに将来を考え「わたしの進路に口を出さないで」と支援を拒絶する者もいた。徐々に関係が築けてきた生徒から拒絶されたことは、山村さんにとっては辛い経験であると同時に、「大学に行くことが“絶対にいいこと”なのではない」「生徒にこういうところへ行くことを勧めているけれどもいいのだろうか」という自身の気持ちと、組織の方針との狭間での葛藤を感じるきっかけにもなった。だが一方では、「結果的によかったのではないかと思える例が過去にも割とある」ことから、組織の一員として、他のメンバーと協同して、「生徒にとってはこうするのがよいだろう」という進路をすすめ、生徒にきちんと説明しわかってもらうことで「おせっかい」をしているという後ろめたさをなくそうとする場合もあった。

山村さん自身、生徒に応じて自分の対応を変えていることを、「向こう（生徒）のニーズに合わせて」と語るのだが、実際のその場その場での対応は、「結構もっと成り行き」であることも自覚している。組織の一員として、B先生や周りのメンバーに活動の方向性や選択に対する正当性を確認することで、自分自身の気持ちの安定を得てやってきた、と振り返る。このような「周りの中の一人」という立場のとり方に対し、「他人任せで能動的ではない」とも感じるが、個々のケース対し、その場その場でよい方法を模索してという山村さんのやり方は、その後の後輩達にも受け継がれていき、TEAMの支援の一つの形になっていった。

（ケース3）松川さん

大学院1年の時（2002年）に、演習の授業のレポートを書くためのフィールドを探していたところ、ゼミの教員からTEAMの活動を紹介され、参加。前年度から活動していた山村さんから、「不良っぽい子がいっぱいいる」「でも意外といい子だよ」などとうわさを聞いていたため、「生徒とか雰囲気に馴染めるかな。」と不安に感じ、最初は「結構緊張」していたが、「意外と素朴な感じの子が来てくれた」ことで安心し、スムーズに活動に加わっていくことができた。活動の内容は、おしゃべりをしたり、勉強を見たり、志望動機を書くのを手伝ったりという、あまり厳密なものではなく、「その場に行って、その雰囲気を見ながら、その子のできそうなことをやる」という形だった。

松川さんは、2年間にわたり継続して活動に参加してきたのだが、活動に参加している間ずっと、他人の進路を左右する部分に入り込むことに対して、「自分のやっていることが本当にこれでいいのかな」という気持ちを持ち続けていた。生徒が迷っている時に「本人が思っているのが正しいんだよと元気づける方向に援助するのは簡単」だが、生徒の意に反する方向へ勧めたり、「もうウザイから関わらないで」と支援を拒絶する生徒に対しても関わり続けるような時には、「結構きつい」と精神的な負担を感じもするし、そこまで勧める必要があるのかと悩んだりもした。また、塾や家庭教師で教える場合とは異なり、A商の生徒は必ずしも勉強することを望んでいるとは限らないため、教えることが自分の役割と割り切ってやるわけにもいかず、組織としての方針との間に葛藤も感じた。

だが、A商に通うこと自体は、苦痛なわけではなく、生徒と話すのは楽しく、生徒が少し幸せになることをうれしく感じたりもしていた。それは、「その子の人生にちょっと関わったわけだから」「普通に心配」に感じるし、「かわいいっていうか、やっぱり行ってると仲良くなるわけだし」、「普通に友達とかでも大変なことがあった時とか放っておかない」のと「同じような感覚」、つまり、愛着とでも呼べる感覚であり、このような感覚を持てる関係を築けたことが、活動にかかわり続けられた理由の一つである、と振り返る。また、「生徒がちょっと幸せになってうれしいな」という気持ちを実感として体験したことで、接客や人を相手にする仕事に「（自分は）結構向いているかな」と、自己の適性を再発見するきっかけにもなった。松川さんは、自分自身の進路選択につながったという意味で、このボランティア経験をプラスに捉えている。

一方で、松川さんが参加し始めた頃、この活動自体は始まって3年しか経過しておらず、活動の内容や方針が定まっていたわけではなく、ボランティアの立場や役割、方向性が明確ではなかったため、新たに参加するものにとっては、「初めて会ったもの同士が何をしていいのかわからない」こともあった。松川さん自身も、活動を始めた当初、A商に行っても生徒が来ないので「しばらく部屋にいてぼっとして、何もやることがない」という無為な時間を過ごすことが度々あった。松川さんは、大学院生で他の学生たちより年上でもあり、また研究しているという自負もあったため、

抵抗なく活動に入り込むことができたが、新しいボランティアで自分の居場所が見つけられない人は居心地が悪くてやめちゃうんじゃないかと感じていた。しかし、このような活動に対しては、「やる側もしてもらう側も何かしら得るものがある」、「ずっと成長していく中で、あの時こう、なんかしてもらったなとか、してあげたなっていうのが残る」と思うから、ボランティア経験はした方がいいと感じているし、そのために組織として、「最初に行って、何をして、誰に会って、誰かが仲介してくれてみたいなシステム」を作り、初めての出会いの場面がうまくいくような体制を整える必要性も感じた、と述べている。

（ケース４）水本さん

大学１年の時(2003年)、教職関連の授業でビラを配られ、「暇だからとりあえず行ってみようというノリで」参加した。それ以来継続して活動に参加し、2004年以降は活動の中心的なメンバーである。生徒と初めて会った時の印象は、「普通の高校生だな」「むしろ真面目だな」というもので、あまり違和感を感じてはいない。だが、だんだん生徒と親しくなり、生活環境や小・中学校での学習体験を聞くようになると、自分とは違う体験をしてきていることがわかり、小・中学校での勉強を下敷きにして高校での勉強を教えていくというやり方では対応しきれないことを実感し、違和感を感じるとともに、「どう教えればいいのか」と悩んだりした。

しかし、徐々に、宿題として渡されたものを普通にやってくるという習慣が身に付いていないことは「彼女たちにとっては当たり前」であり、小論文も生徒一人では一字も書けないこと、漢字の練習問題でも一人で取り組むことができないことを理解するようになる。また、活動を続けていく中で、生徒たちが高校やそれ以前の中学で教員から否定的な評価を受けて来ていること、そのために自己評価が非常に低いことを知り、自分の高校時代を引き合いに出しての「高校生とはこういうもの」という認識がゆらぎ、多様な背景を持つ生徒たちを許容できるようになっていった。

また、出会ったばかりの頃には「水本さん」と「さん」づけで呼んでいた生徒たちが、あだ名で呼んでくれるようになることをうれしく感じる反面、親しくなってからの距離のとり方や、ボランティアへの依存の仕方という点で、自身の経験や想像の範囲を超える接し方をしてくる生徒には困惑することもあった。結構重たい内容のメールが頻繁に来たりすると、どこまで付き合えばいいのか、どこで線引きしたらいいのか、と悩んだりもした。

水本さんが活動に参加した頃には、TEAMの活動も５年目に入り、少しずつ経験が蓄積され、先輩のボランティアが後輩にアドバイスをしたり、後輩が先輩の指導を見て生徒への対応を身に付けていったりするようになっていた。例えば、小論文の指導については、たとえ生徒の書く文章が稚拙なものであっても、生徒本人の言葉で書かせること、具体的には、単語レベルでの箇条書きを徐々につなげていき、内容や表現の不十分なところを会話を通して推敲し、文章として完成させるという方法が受け継がれていくようになった。水本さんは、生徒の現状に合わせて、生徒とのやりとりの中で、やり方を模索し、生徒本人に達成感を持たせることに価値を置いて活動を続けてきている。

水本さんは、この活動を通して、背景の違う人とでもコミュニケーションができるようになり、「高校生はこういうもの」という凝り固まった固定観念がなくなったことを肯定的に捉えている。また、最初は生徒とは友達感覚だったが、先輩としての自覚も生まれ、生徒が短絡的な発想から希望を述べる際には、長期的な視野に立ってアドバイスができるようにもなった。しかし、生徒を合格させなければいけないという義務感や使命感はなく、水本さんにとってこの活動は、「生活の一部」であり、衣食住と同じくらい生活の中に深く位置づいた日常的な活動である。

（ケース５）金沢さん

大学１年の時(2003年)、教職関連の授業でビラを配られ、「（ボランティアに）行ってもいいくらい暇だった」ので、ボランティアに対して全く興味がなかったが参加を決めた。それ以来継続して活動に参加し、2004年以降は活動の中心的なメンバーである。

最初の頃は、公務員試験に向けて受験勉強をしている生徒がいたため、高校の頃の受験勉強の知識をフル活用し、英語や数学の勉強（知識）を教えるという活動をしていた。だが、２学期に入り、金沢さん自身のプライベートな悩みを生徒や先生に相談したことを機に、「私も一緒に生徒になっている感覚」になり、それ以降は、「教えるんじゃなくて一緒に頑張っていこう」というスタンスで活動に参加してきた。この時、大学生ならあたたかく聞いてくれるところを、高校生から「涙ぐむくらいのダメ出し」されたことが、TEAMに居つくきっかけになった、と振り返る。

金沢さんは、A商での自分たちの役割を、「先生がで

きないこと」を引き受けることと捉えている。具体的には、まず、生徒と時間を共有し、関係を作り、生徒の話を聞き、考えを理解し、それを進路選択や進路の実現に生かしていけるように、生徒に寄り添っていくというスタンスである。小論文の指導についても、金沢さん自身は、小論文を書いたことがないため、どう指導すればいいのかは「手探り状態」であるが、「(生徒が)どんな考えをする子なのか、わかってからやる」ことが大切であると考えていて、指導の技術的側面についての力量不足に悩むことはない。

金沢さんは、生徒に自分の悩みを相談するほど生徒たちと親しくつきあっており、A商に行けば、生徒たちが「金沢ちゃん」と呼び抱きついてくるような関係で、金沢さん自身、「行って喜ばれるのがうれしい」と感じている。だが、それが高じて、生徒から個人的な悩みを相談されたり、頻繁にメールや電話が来たりするようになると負担に感じ、どう対応すればよいのかと悩んだ。だが、ボランティア仲間と相談し、協力し合って卒業までは生徒の面倒を見続けることで解決した。

金沢さんにとって、この組織は「活動場所が高校」のサークルであり、活動に参加することは、「生活の一部」である。ボランティア仲間である大学生にも、支援する対象である高校生にも友だちがいるが、「高校生の方が友だち」であり、高校生をもメンバーに巻き込んだサークルという捉えであると考えられる。

7．ボランティアの成長過程

それでは以上の事例をもとに、4で立てたリサーチクエスチョンに沿って、ここで対象としているNPOに関わってきたボランティアの成長過程にみられる特徴を考えてみたい。

(1)A商生との出会いと自己の価値観のゆらぎ

ボランティアである学生、院生にとって、A商の高校生というのは、普通に学生生活を送っていれば出会わないまま過ぎてしまう相手である。だが、5人のインタビューから分かるように、彼らのA商生に対する最初の印象は「自分たちとは違う」というよりも、むしろ「違っているのかと思ったらよく似ていた」という印象であった。秋田さんは生徒に会って「普通の子」だなと感じたと指摘したが、同じ言い方を水本さんもしている。「普通」とは自分たちの想像の範囲に収まっているということであるが、それを声に出して言うのは「A商生は違う＝普通ではない」という当初の予想が裏切られたからである。松川さんの「意外と素朴な感じ」というのも、そうした捉えに近いと思われる。

だが、しばらくするとボランティアたちは、「一見同じ」に見えた相手の中に、「自分たちとの違い」があることを実感するようになる。それは生徒たちが思い描く進路の選択肢の多様さであったり、彼らの小中学校での学校体験や自己評価の低さなどであったりする。そして、その違いの認識が、翻って自己の価値観をふり返らせることとなる。

たとえば、山村さんの事例では、生徒が思い描く進路が実に多様であり、「その1つの選択肢として大学進学があるにすぎない」という発見が、進路と言えば「大学か専門学校か就職か」という枠内で考えてきた自分自身の価値観をゆさぶるものとなった。水本さんは、生徒たちが教員から否定的な評価を受け続け、それゆえにきわめて低い自己評価しか持てないでいることを知ったことで、自分自身の高校生時代の経験に基づいてイメージされていた「高校生とはこういうもの」という捉えにゆらぎが生じ、多様な高校生を許容できるようになったという。

(2)生徒への関わりをめぐる悩みや葛藤

もう1つの彼らの学びと成長の契機は、活動を継続していく中にある。様々な形で価値観を揺さぶられる出会いの次にボランティアが直面するのは、「彼らとどう関わればいいか」という課題である。教師と違い、彼らの役割規定は明確ではなく、教える内容も決して決まっているわけではない。この中で、それぞれが手探りで自分の関わり方を見いだしていく過程こそ、ボランティアの学びと成長の1つの重要な契機であろう。

ボランティアがしばしば悩むのは、生徒に何をどう教えればいいのか、また彼らとの距離をどうとればいいのかといった問題である。たとえば、秋田さんは「小論文のプロではないので、こんなのでいいのかしら」と思ったという。また、松川さんは相手の進路を左右する問題に入り込むことはいいのか、という気持ちを持ち続けていた。

一方、水本さんは、親しくなった生徒との距離の取り方が、自分の標準と相手のそれに齟齬があり、どこで線引きすればいいのかと悩んでいた。こうした相手との距離の取り方をめぐる悩みは金沢さんも感じており、他の多くのボランティアも指摘した点である。

生徒との関わりの中で、ボランティアがしばしば直面するもう1つの悩みは、こちらが期待するほどには

相手は動かないという問題である。山村さんの事例で指摘されていたように、生徒の中には宿題をやってこなかったり、生活パターンの乱れから受験準備が計画通りに進まないことがしばしばある。活動に行っても生徒が来ないということもあった。

⑶組織をめぐる葛藤

インタビューをしていく中で、我々は、当初は明確に意識していなかった要素として、組織をめぐる葛藤の多さにも気がついた。もっとも頻繁にボランティアが指摘したのは、大学進学への働きかけを前提に取り組むという本活動の組織としての方針との間で生じる葛藤である。

松川さんが語ったように、この活動に参加する生徒は、勉強することを望んでいるとは限らない。とくに活動の初期は、B教諭から積極的に働きかけがあって活動に送り込まれた生徒も多かった。中には、「もう関わらないでほしい」と支援を拒絶する生徒もおり、その対応を通じて、ボランティアの中にはどこまで関わっていいのかと悩む者もいた。山村さんが指摘したように、「葛藤を抱えつつも、その場その場で生徒の様子やニーズにあわせて対応する」「メンバーやB先生に確認することで自分自身の気持ちの安定を得て、関わりの意義を生徒に説明する」といった対応へと向かったのはその葛藤の1つの処理の仕方であった。松川さんもそうした悩みを持ち続けたが、その活動を振り返って「やる側もしてもらう側も何かしら得るものがあると思う」と述べている。だが、一方で彼女は、ボランティアの役割や居場所が明確ではないため、新しく入った人の中でも居場所を見つけられない人は、居心地が悪くてやめてしまうのではないかと述べ、組織としてボランティアする側がやりやすい体制を整えることも必要と感じていた。

8．ボランティアとしての自分なりの関わり方

以上のように様々な局面で、ボランティアは相手との関わりの中で悩み、葛藤を抱えている。だが、そうした中で、彼らはそれぞれボランティアとして自分が相手にどう関わればいいのかの答えを探し出そうと努力している。そこには、出会いの過程でふり返ることとなった自己の価値観への反省も踏まえられている。

秋田さんは、自分を「外部の人」と位置づけ、「自分のできる範囲でやればいい」と考えた。山村さんは、生徒からの拒絶に遭ったり、組織の方針との間に葛藤を抱えながらも、「結果的によかったこともある」と思い、活動のメンバーの一人として関わっていこうとしている。また、金沢さんのように、「高校生と一緒」という感覚になり、「一緒にがんばっていこう」という姿勢で取り組む者もいる。彼女はボランティアには先生とは違う独自の役割があると捉え、生徒と時間を共有し、彼らに寄り添う姿勢を大事にして取り組もうと考えている。

さらに、関わり方は活動を継続する中でしだいに変化していくものでもあり、たとえば水本さんは、当初は友だち感覚であったが、次第に先輩という自覚が生まれ、長期的な視点でアドバイスができるようになったと述べている。

こうして自分なりの関わり方を見つけ出していくことで、ボランティアはそれぞれ活動を継続させている。その過程はこれまで見てきたように、きわめてダイナミックなものであり、その過程を通じて彼らは自分自身や相手とどう向き合うのか、活動において自己の役割や立場は何かを1つ1つ掴みとっていくのである。

（1、2、8酒井、広崎、6広崎、風間、4、7酒井、3、5千葉）

引用文献

酒井朗・千葉勝吾・濱野玲奈・広崎純子，2004「高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究―A商業高校での支援活動の取り組みを通じて―」『お茶の水女子大学　子ども発達教育研究センター紀要』第2号．85-100頁。

酒井朗・千葉勝吾・広崎純子・齋藤玲奈，2005「高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究(2)―進路形成過程における転機の存在とジェンダーの影響」『お茶の水女子大学　子ども発達教育研究センター紀要』第3号，97-112頁。

佐藤一子編，2004『NPOの教育力―生涯学習と市民的公共性』東京大学出版会

高橋満，2004「NPOにおける学びの公共性」佐藤一子編，同上書，23-44頁。

橋本鉱市・石井美和，2004「ボランティアと自己実現の社会学―その接合にみる言説・政策・理論・個人―」，87-119頁。

原田隆司，2000『ボランティアという人間関係』世界思想社。